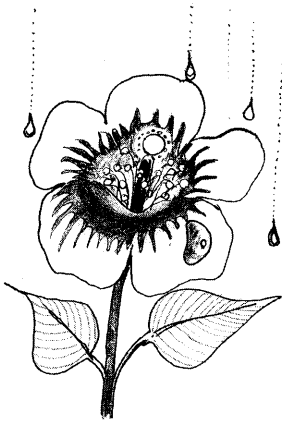
〈巻頭言〉

保育の中の「環境」ということ

清水　光子



「草笛や子が留守の家吹き歩く――加藤知世子――僅か数年前どこにもこのような情景はあった。」「毎年今頃になると、東京丸の内にあるビルの人工池からかるがもの親子が皇居のお濠へ引越しのニュースがある。」「ここはもと武蔵野の雑木林で、子ども達とどんぐりを拾った丘。が、芝以外の草一本もないように整備されたゴルフ場のグリーンになった。」「十年程前には獣道もがけ側にあったハイウェー。時速百粁近いスピードで、『自然を満喫しよう』と国立公園をめざす車の列。」「広い砂丘がつづいてい、矮小な松の防砂林が汐風をあびていた鄙びた海岸に、白い十階建てのリゾートマンションがあっという間に建った。」……「この辺、年々変わりますねえ。」という挨拶さえまれになったあちこち。〝自然を大切に、自然を○○〟というキャンペーンの裏側で。

生活環境が変わることは歴史を繙くまでもなく当然のことで、昔から人間誰しもより豊かな快適な生活をと求めてきている。情報化社会と言われるが情報伝達の方法など、目も耳もくらむような有様である。科学技術の進歩発達のおかげ様でと喜んでばかりでないことは今、みな気付いていると思う。気付かない筈はないと思う！　物事、プラスがあればマイナスがあるから。

ＥＣＯＣＩＤＥ意図的環境破壊をしているのである。

人間は、というより生命（いのち）あるものは環境に育てられる。環境の影響が生物の育ちには大きくかかわることは今更いうまでもない。これから育とうとする幼い生命は殊にその影響を強くうける。よくも、悪くも、である。何もかもが便利、簡単になった日常生活の裏で、子ども達の思考力、創造力、筋力などが低下してきていると言われる。大人の作った環境の変化がなせるわざ！「よかれと思ってしたことなのに……」という古い悔悟のことばが思い出される。人間という生態系の頂点にある（と自負している？）者が自らやりつづけているとはどういうことだろう。何と矛盾だらけな！

水上勉・灰谷健次郎両作家の往復書簡を読んで沢山の教えと感動を得た。「自然との調和本気でそれを考えたら人間の生活は相当厳しくなる」「生命に対するこまやかな感情、心ない大人たちによって、或いはまた優しさの通らない社会によって踏みにじられ、傷ついていく子ども達や若者たちがあまりに多い」「生命への畏敬のないところに教育はない」等々。

新しい幼稚園教育要領の「環境」という領域は前要領の領域「自然」が中心ときく。「自然や社会の事象など云々。環境に積極的にかかわる力を育て、生活にとり入れ云々」とある。そしてどうそれを実際に保育の場に生かすかは保育者にゆだねられているという。ああ、ああと声にならないもどかしさ。

梅雨空の或る日、郊外の友達の家を、始めてで尋ねあぐねて歩いていたとき、低い生垣の角を曲がった、さほど大きくない平屋建てから、何とも言えない響(とよ)みがきこえ、私を襲った。打たれたように立ち止まった。何のことはない、子ども達が嬉々として遊んでいたのだった。後で友達にきくとお母様がもう数十年前から園長で、今は息子さん夫婦と数人の若い方が保育しておられる○○幼稚園だとのこと。いろいろな木や草が、雑草とよばれる草も、いつも一ぱいあって、庭の中を子ども達が駆けまわって遊んでいる、という。

ロバート・フルガムの『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』の幼稚園。「環境がどうあろうと人間性の本質は容易には変わらない」というアガサ・クリスティがミス・マープルに言わせていることば。そんなことを思い思い、何はともあれ子ども達一人ひとりが一とき一ときを充実して生きる「生活を、生活で、生活へ」との場とときを、パンドラの箱の残り最後を念じたのである。

（音羽幼稚園）